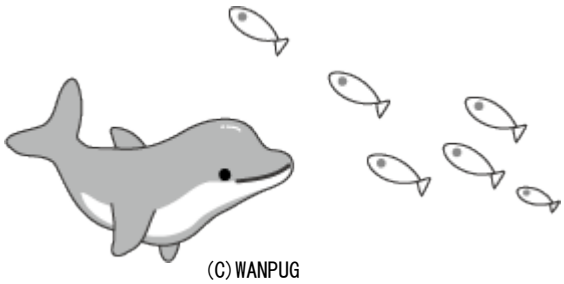
2017 年 7 月 1 日発行

点訳通信

94 号

日本ライトハウス情報文化センター
点字製作係
発行責任者　竹下　亘
〒550-0002　大阪市西区江戸堀 1-13-2-8F
TEL 06-6441-1028（点字製作係直通）

ここ数年、行列に並ぶということが面倒で、むしろ「そこまで情熱を注げない」と避けていました。ところが、偶然に友人と食のイベントに立ち寄ったとき、気になるお店を見つけてしまい、久々に行列に並ぶことに。待つこと３０分ほど。無事にお目当てのものを手に入れることができました。その時、思ったより待ち時間を短く感じたことと、誰でも「手に入れたい！」という意欲があれば、どうってことはないのだと思いました。　（点字製作係　奥野真里（おくのまり））



【 休館・開室のお知らせ 】

７月１５日（土）開室
８月１１日（金）休館（山の日）
８月１２日（土）～１６日（水）夏期休館
＊ご迷惑をおかけしますがよろしくお願いいたします。
＊１７日（木）から平常どおり開館します。
９月１６日（土）開室
９月２３日（土）休館（秋分の日）
９月３０日（土）休館（～10/1 日本ライトハウス展）

「点字毎日」のデータ化作業が教えてくれたこと

水谷（みずたに）　昌史（まさふみ）

●水谷昌史さんのプロフィール
１９４２年生まれ。
１９４９年　三重県立盲学校に入学、点字を学ぶ。
１９６２年～　日本ライトハウス点字出版所に勤務。
１９７９～１９９２年　盲人情報文化センター（当時）に異動、点字製作に関わる。
１９９２年～２００１年　東京ヘレン・ケラー協会点字出版局に勤務。
２０１５年４月～「点字毎日」データ復刻版製作に関わる。

皆さんは「点字毎日」をご存知ですか？毎日新聞では１９２２年５月から現在まで、「点字毎日」（略して「点毎（てんまい）」）という週刊の点字新聞を発行しています。世界に比類ない事業です。２年ほど前から、主に情報文化センターで昔の「点毎」のデータ復刻版の読み合わせが行われていて、私もそのお手伝いをさせていただいています。

その作業を通しての発見は色々ありますが、ここでは点字表記についての話題をご披露します。

「点字毎日」の復刻版データ化作業とは？

最初にデータ復刻版について。

発刊から今日までの「点毎」は、２５号分を１冊に合本して倉庫に保存してありますが、時の経過とともに紙の破損や点字の摩滅が進みます。そこで５年前、「点字毎日」は、同紙発刊９０周年記念事業として、これらを再点訳してデータ保存しようと考え、作業を全視情協（全国視覚障害者情報提供施設協会）に委託。同協会はパソコン点訳を島根あさひ社会復帰促進センター（島根県浜田市にある刑務所）の利用者さん（受刑者）にしてもらい、その校正・データ修正を点訳ボランティアさんに委任しました。作業手順は、まず全視情協の手で刑務所の人たちに点字指導を行ない、点字の原文を目で読んで１字１字パソコン点訳してもらいます。そのデータと原本を情報文化センターに送ってもらって、点訳ボランティアさんと触読者が照合し、データの誤りはボランティアさんが修正。こうして作られたデータ復刻版が「点字毎日」に収められます。昔の「点字毎日」は、（変動はありますが）およそ１号１６ページ、１ページ２９行、１行３９マスです。全視情協はこれも点訳ボランティアさんにお願いして、通常の点訳書サイズ（１ページ１８行、１行３２マス）に再編集して、サピエ図書館

に順次登録しています。

時代とともに点字も進化する！

この一連の作業の中で、私は点訳データの読み合わせを受け持っています。つまり、私が点字の古新聞を触読し、点訳者さんが点訳データを読んで、点訳の誤りはその場で修正するわけです。ですから正しい点字文を作るための読み合わせでなく、たとえ誤字があり、分ち書きが変でも、点字の原文どおりに修正して復刻版を作るわけです。ですから主役は点訳者さん。私は「点毎」というタイムマシンで昔の点字世界を旅している、思えばありがたいボランティア活動です。

この時間旅行の土産話は多種多様、三日三晩話しても尽きませんが、皆さんの関心事である点字について一言で言えば「点字は進化している」、言い換えれば「点字は一日にして成らず」です。昔の点字新聞には誤字が多く、仮名遣いや分かち書き、記号の用法や見出しの扱いなども支離滅裂というか、いいかげんというか、要するにめちゃくちゃ。昔の人は、こんな点字文をよく読解できたものだと感心するほどです（興味のある方は職員さんにお願いして、点字の原文を数行読んでみてください）。ことに大正期は、内容も点字表記も暗中模索だったようで、紙面ごとに異なっていると言っても過言ではありません。

それでも昭和に入って時が経過するほどに、編集も点字表記もそれなりに統一性が見られるようになり、変更されるにしても、その意図が推察できるようになってきています。ではいくつか具体的な例を挙げてみましょう。

古い点字表記のあれこれ

１．仮名遣い

当時はより表音重視（音読するとおりの書き方を重んじること）で、「大阪」を「オーサカ」、「思う」を「オモー」、「言う」を「ユー」と書いていました。

２．句読点

読点と中点が点字でも公式に使用されるようになったのは１９９０年以降。句点も昔は用いないのが主流でした。ただ「点毎」では段落など文の変わり目を表す記号として句点を用いていました。そして文末は２マスあけていました。

３．アルファベット

外国語やアルファベットは点字も活字も同じで、今の新聞に比べれば、はるかに少なかったようです。点字には「ツェ」「チェ」「フィ」などの特殊音がなく、「ツエッ

ペリン」、「チエッコ」、「コールフイールド女史」などと書いてあります（もしかして墨字でも同じだった？）。そしてアルファベットをどうしても書きたい場合は、「エヌエッチケー」などと発音どおりに書いてあり、単位記号以外でアルファベットを書くことは皆無でした。

４．今はなき記号

自然淘汰された記号、形を変えていった記号もあります。「踊り字記号」とでも言いますか、「ワレワレ」「ヒトビト」と書く代わりに「⠸⠸」「⠹⠹」と、「２・３・６の点」を使うのです。これは非公式な文字ですが、私の若い頃には、ある点字出版所で用いられていました。便利な略記法ですが、今では滅びてしまいました。

また疑問符は、昔は「２・３・６の点」（英文と同じ）でしたし、小数点は「４・６の点」、→「３の点」→「２の点」と変異し続けてきました。

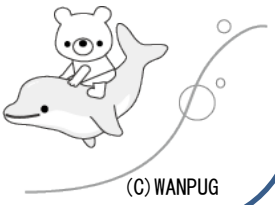
未来に残す点字世界の遺産として

これらの古い記号を「点毎」紙上で見るたびに子どもの頃の点字を思い出します。

このごろの点字表記は、ずいぶん規則が整えられ、点訳・校正のレベルも格段に進歩したものですが、それでも時代の変化とともに活字も点字も変化を余儀なくされ、絶えず進化していくようです。「点毎」製作にコンピューターが導入されたのは１９９２年で、それ以前の物はデータ保存する必要があるでしょう。

読み合せはやっと１９２９年末まで到達。気の遠くなるような作業が続きます。「私がダーウィンだったら点字進化論を書くのに」――そんな空想を楽しみながら、これからも点字の古新聞を読ませていただこうと思っています。

★お願い

１０月１９日(木)～２０日(金)、大阪で全視情協(全国視覚障害者情報提供施設協会）の全国大会が開催されます。当日は、各地の点字図書館や点訳・音訳グループの代表者や担当者が全国から集まり、研修会を行います。今回は当館が主幹担当となっており、当日の運用なども行うため、この２日間はボランティア活動を休止させていただきます。ご協力とご理解のほど、よろしくお願いします。

なお、大会の準備等でボランティアの皆様にご協力をお願いすることがあるかと思いますが、その際は重ねてよろしくお願いいたします。